

「最期の手紙」

「Nさんの墓参りに行こう」、あるお客様から誘われて秋分の日に2人で職親Nさんのお仏壇に手を合わせてきた高野です。

ことの発端は、8月の初盆に私がお花を届けたことでした。お届けしたお花に奥様が大変喜ばれ、私へ手紙を書こうと便箋を探し出すと、そこに故人が残した私宛の手紙を見つけるのです。

「高野さん 今までいろいろありがとうございました。 N・E」

間違いなくNさんの字です。そしてその時、奥様は私以外のお客様にも手紙を書き残していたのを見つけます。Nさんが親子3代に渡って、親しくお付き合いしてきた会社には、M会長夫妻への手紙がありました。それに続いて現M社長夫妻に書こうとしていた手紙は宛名書きだけで終わり、本文は空白でした。その空白部分に奥様が書き足したお手紙の写真が、お客様から私に届きます。

「力つきて、お礼の言葉が書けなかった様です。私には優しい御方と聞いております。お世話になり本当にありがとうございました。」

その本文のない宛名だけの手紙を見た時、胸がジーンとしました。文字にはならなかったNさんの気持ちを感じました。

Nさんは奉仕の精神に溢れた人でした。お客さまのためならどんな面倒もいとわずやる姿は同業者も「そこまでやるのか」と引いてしまうほどでした。それでいて、決して恩に着せるようなところはなく、お客様から気を使われないようにしていました。

お亡くなりになったのは昨年12月30日。暮れの忙しい時期だからお客様にも知らせるなと、親子以外の葬儀に招かれたのは私ともう一方だけ。

「決して香典はいただかないように」との遺言するなど、最期まで人に気を使わず、この命日を選んだのではないかとさえ思えました。そして私がNさんの「死」を伝えるメッセージャーに選ばれたような気がしました。

年が明けて、私はNさんを知るお客さまに伝えて回りました。Nさんの遺志を汲んで、お客様もご遺族へのお参りを控えてくれました。

けれど私の中には、釈然としない思いが残っていました。

今回一緒にお参りしたM会長はNさんと60年来のお付き合いです。きっとお参りしたかったことでしょう。だからこそNさんの手紙がきっかけでお彼岸参りができて、肩の荷が下りた気がしました。

Nさんの苦労があつて、引き継がれたお客様がいて、今の私がある。改めて良い仕事をしなくてはと思ったお彼岸でした。